OA

線引きの振り返り

初日は先週の金曜日。
あれ？もうそんなに、日にちが経ったのかと、ここ一ヶ月間の時間が、小さなボールのような塊になって、遠くへ放り投げられたような感じだ。

実際に制作を始めたのは、お盆の後少し経って 8 月 24 日だった。それから二、三日おきに茨木市福祉文化会館の地下に通う生活が始まった。

まだまだ午前中の日差しがキツく、昼前に現場の地下室に入ると目が落ち着く。地下室にクーラーはないが、日光が入らないので、上階の部屋ほど暑くない。しかし猛烈な湿気がこもり、汗がじわじわと出てくる。
茨木市の担当の方が、業務用扇風機や、冷えた飲み物をはじめ、準備された暑さ対策の心遣いが、気持ちを和らげてくれた。

携帯の電波や Wifi は、地下では一切届かない。
参考資料にと、写真を見る気にもならない。頭を働かせて構成するなど、不可能だった。もともとただ、線を引けばいいという、シンプルなところに立ち返ろうとしていたではないか。

画材は、O JUN さんが選んで送ってきてくれたものを使う。アクリル絵の具スプレーと木炭。色の選択は O JUN さんに任せた。自分で選んだものではない色を使う。あくまでこの「線引き」制作は、2 名の作家によるものなのだ。

普段自分が選ばない色を使うことは、企画意図にあるように「線引き」をはぐらかして行く手段だった。後になって思えば、そのような絵の描き方は、初めてだった。この方法は、「私が、私の選んだ絵の具で、私の内面を吐露する」という、コテコテのエゴを解きほぐしてくれる。
なぜ、このようなやり方を今まで思いつかなかったのだろう。

O JUN さんが制作に入る 9 月 9 日までの間、5 日間ほど作業しただろうか。描き初めは、ただただ楽しいものだ。広いコンクリート空間の中を走り回って描くことができる。あの色、この色と何も考えずただ線を引く。

スプレーで吹き付ける作業は、壁や床との距離があり、筆という厄介な道具を使わないので蒸し暑さの中でも作業が進む。スプレーの黒に対して、木炭の黒はどうか。木炭はコンクリートの壁面や床にしっかりと黒い色を残す。これも意外な発見だった。
ざらざらした面では、かなり削れてしまい繊細な線を描くことは難しい。その代わり、三次元の空間内で、木炭を振り回すという傍目から見たら、かなり悍ましい描画をしていた。

頭の中に O JUN さんが描くであろう線が浮かぶ。それと目の前の自分の線が重なり、離れつつ描き進めていった。作業の途中から、予定表が白紙の日々が続く。行っても、ほとんど描かずに、ただその場所にいた日も含めて。

このままでは、際限なくダラダラとエゴが垂れ流されるまま、描いてしまいそうになる。入って奥の正面の壁とその横の壁は、O JUN さんに最後線引きを締めてもらおうと、空けておいた。

互いの「線引き」の時間は予想通り異なっていた。そして、何日同じ場所で描こうが関係がなかった。各々が元から持っている「描き」の時間が異なるからだ。

滞在時間 3 時間半の間、O JUN さんが本気で「線引き」を行なった。

最後に、地下室の妖精のような少年が現れて、スプレーを吹いた。少年の「そこにあるからやってみた」色と形は、2 名のエゴの輪郭に橋渡しをする役目をし、「線引き」は終了した。

共同作業、共同制作とは異なったやり取りによる、内向きのひたすら内向きのグラフィティが生じ、ようやく秋を迎える。

松井智恵　2025 年 9 月 15 日筆

松井さんとぼくの線引き

松井智恵さんから今回の「ライフライン」へのお誘いと、キュレーターである福元さんの展示へのお考えを知って急遽参加させていただくことにした。ちょうど大阪関西万博を観に行く予定を入れていたので、わずかの時間ではあったが当地での制作に興味をもった。松井さんとぼくの場所は地下二階のコンクリート壁の空間と聞いていたので松井さんに地下帝国ですねなどと軽口を利いていたのだが、実際に現場を見ると果たしてハードな空間だった。にもかかわらず、松井さんは既にほとんどの壁と言わず床と言わず描き広げておられ、もう充分ではないかと思った。”オーさんの壁と床を残しています、正面と左のブロック壁です。わたしの描いたものの上からもかまわず描いちゃってください”と言う。見ると、松井さんのスプレーと木炭はあり得ないドローイングを重ね絡まり縦横無尽に描かれつつも、ぼくの制作時間のことも配慮してくれてここまで単身奮闘されていたのだなと思ったら途端に心に火が入った。松井さんが床の中ほどにスプレーで青いラインと黒いトンボを描いている間にわずかの間隙があったのでまずその間に木炭でを線引きして結界と架橋を線引きしてから正面の壁にアタックを開始した。

最近絵の縁取りをしてから中身を描くことをよくしている。それをこの壁でやってみよう。木炭とスプレーで四辺を囲い込んだ。松井さんがこの壁の左右から中央付近からやや下位置に木炭で数本の水平線を引いていた。その最上部に引かれた一本を青色のポスカで何度もなぞり水平線を描いた。画面左上に紫色のスプレーで大きな丸を配した。また下に下がって右の縁取りの内側から水平線の上に緑色のスプレーをぷっぷっと吹いて、これで陸海空の絵になった。少し休憩してフチドリ景の両側の壁の空きに顔と顔のような雲を散らしてまた少し休憩。空調は可動しているのだが地下のせいか湿気がすごい。汗がとまらない。松井さんがスプレーで絵を描くけれど室内なので”私たちは「内向きグラフィティー」なのよ” というセリフが思い出されて可笑しくなる。ホントだ（笑）

次に左手のブロック壁にアタック。木炭の付きは紙の上のようではもちろんないが、引くとぞろりずざりと削られてゆく感触が指に直接伝わって来て、描きの快感よりも惨さが振動しとして伝わって来る。１ストローク毎に背中がゾワる。このブロック壁をやっている時は始終松井さんの壁の木炭の線とスプレーの合いがけのようなドローイングが思い出された。それを見ながら手はおろそかになってひたすら線を引いた。手が線だけを引くために思念は松井ドローイングに、頭は松井ドローイングで一杯にして木炭を持つ手はおろそかに、身体を引き裂いて描いてみた。

さらに床面に余力を使って黒スプレーで顔のような形を幾つか歩き拭いて終わった。

顔を上げるとドアのところに少年が一人立ってこちらを見ている。スプレーやってみる？と見せるとうんと言って始めた。床にスプレーを吹いて試している。自分からテーブルの上にある他の色を取りに行って戻ってまた床に吹き付ける。スプレーのノズルを床に近づけたり離してみたりして吹きの加減をみている。ノズルに置く指の圧にも慎重だ。床に次々と大小さまざまな丸が現れる。少年はいくつもいくつも色を変えて吹き付ける。少し大きな丸の周りに小さな丸を拭いてハナマルのような形もある。松井さんのともぼくのとも違う丸が描かれた。この少年の丸だ。

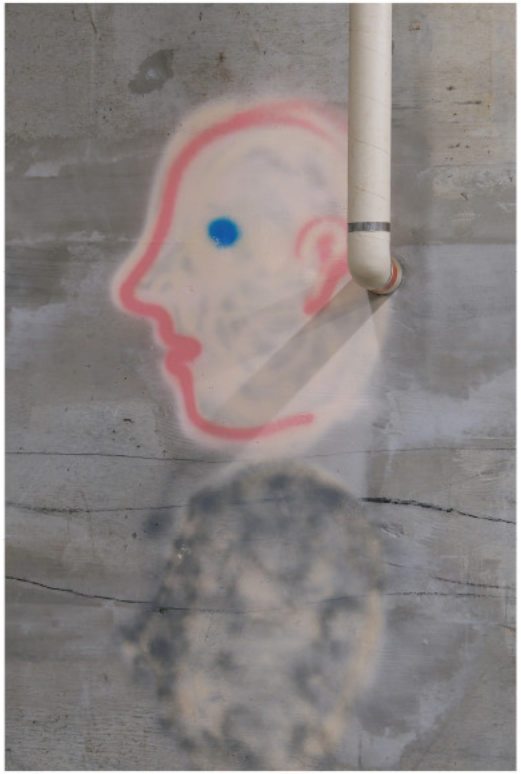
ふと、自分の最初のフチドリの右下角にフチがまだ足りないと思ったのでそこにもう一回木炭でひと描きした。ぼくは少年にお願いをした。あの中に好きな色でぷって拭いてくれない？少年は迷わず緑色のスプレーを取って木炭の囲みの中にひと吹きした。

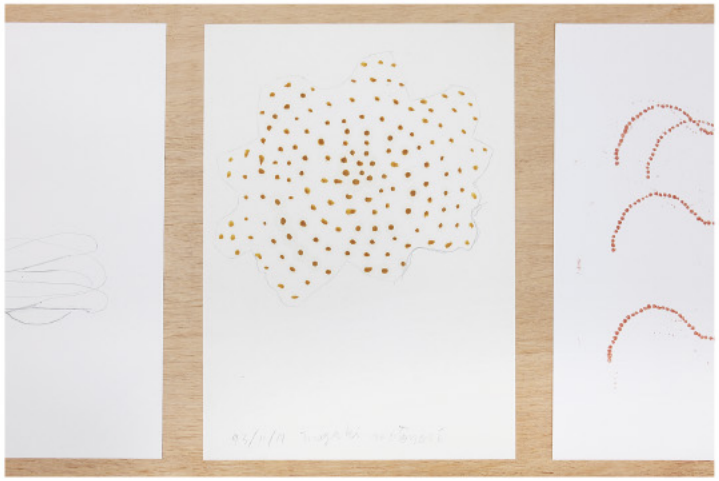
おわり。

臨場、それだと思った。描くことも、観ることも、演ずることも、話し合うことも、人やものが行き交うことも、目的や用途の別なくその場にどのようにか立ち会うその時は全て臨場となる。それをぼくもこの地下で体験した。
終わって田中さんと福元さんに他の部屋の制作と展示を案内していただいた。
どの室にも臨場が漲っていた。形に気配に、これから起こるであろう出会いに。

取り急ぎ事後報告まで。
みなさま、どうもありがとうございました。

O JUN





3-C の部屋のふたつの映像「Song of Ascension」は、具体的に死んだある人たちのことについて語る作品である。激しい雨と落葉の様子をスローモーションと上下反転と逆再生によって、時間と重力に抗うことを語る。しかし反転や逆行を重ねながらやはり葉や雨は上から下に落下することで、同時に抗えないことも語る。しかし最初の時間と重力とは全く違い、葉は樹に戻り、雨は空に還る。当たり前のような時間の意味や重力の意味はもうここにはなく、この映像はここにある事実をエンプティーにしようとする。

「そう。いや、やっぱり、しかし。」と同時に語り、老いについて、ある人の死について、いつかの死について、結局私はどう受け止め、どう振る舞うかわからないまま、それでも考え続ける。それは常にみずみずしいものでなければならない。そしてそれは不確定・保留状態を維持することを積極的に実践するドローイングそのものであり、拭いきれない違和感を持って、ひとつの結論や納得によって回収されることへの抵抗を続ける。

その保留状態は 2-B の部屋のドローイング群でも続けられる。2015 年から 2025 年に至る 10 年間のドローイングを時系列に 380 枚展示した空間は、系譜のようなものが生まれ、一番シンプルに考えるなら、それは一線上のものとなる。一枚一枚が時間と共に展開する連綿とした物語となり、ドローイングは映画のフィルムのように流れ、私の人生を映像化する。

線を一本引くということは、あらゆる可能性からひとつを選ぶことで、それは取り返しのつかない行為ということになる。そこには意志が宿り、ひとつを選ばなければ「その次の」可能性を知ることはできない。私は取り返しのつかないことへの「はじめから描き直し」を繰り返すことで、人として避けようのない営みを行う。

しかしそれは同時に複雑化する。ドローイングは時間の繋がりや関係、進行や進化を無視することが簡単にできなければならない。天気のような気持ち、分裂、退行、忘却、それらが転じて飛躍や未知も抱えなければならない。

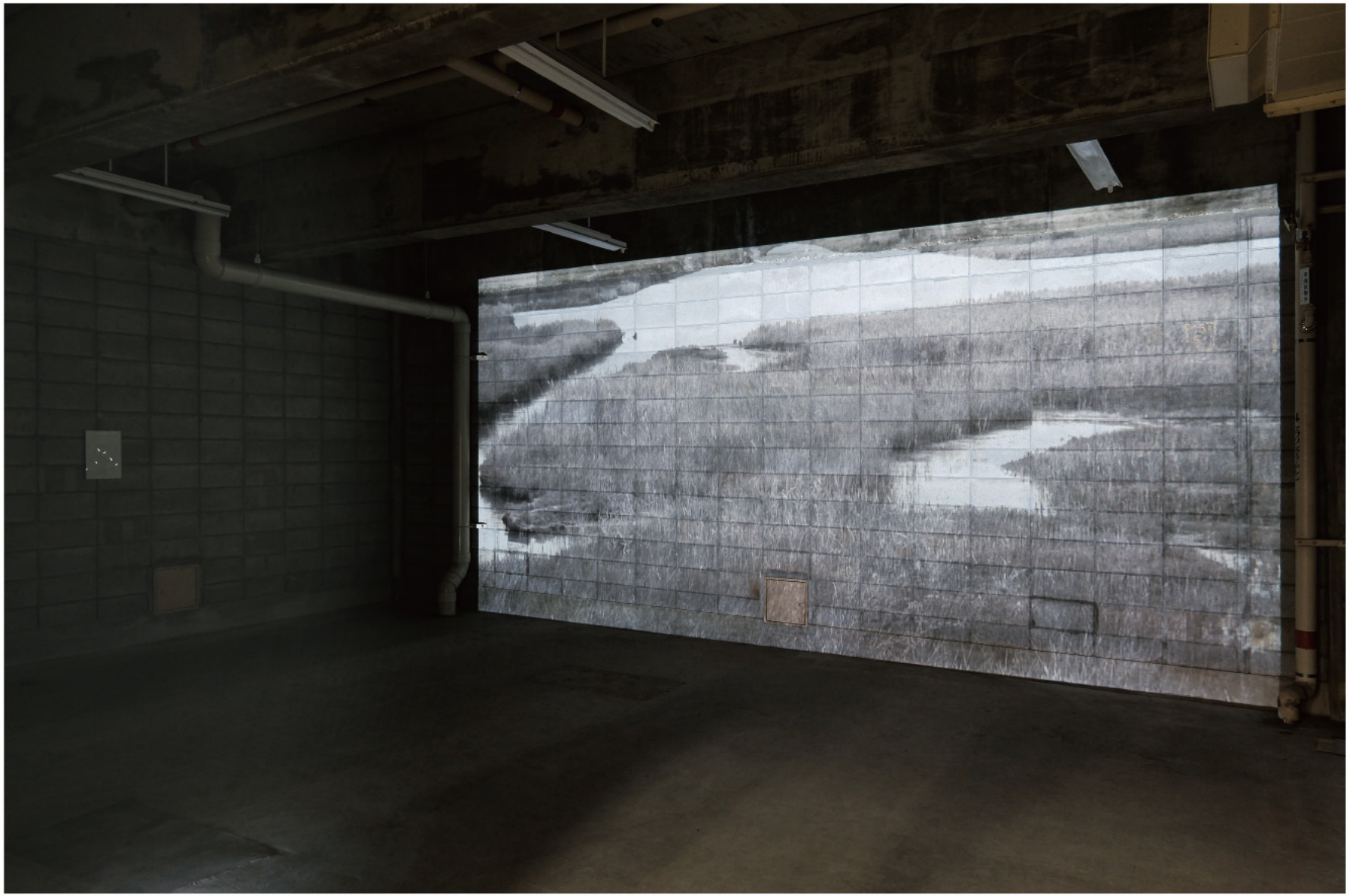
さらに大切なことは、私の日々のドローイングにおける「描き直し」は、描いているその一枚が描き直しなのではなく、これまでの全てのドローイングもささやかに描き直しされているということである。新しく描き直されたドローイングは、過去のあらゆるドローイングの積み重ねの上にありながら、同時に過去のあらゆるドローイングに影響を与えている。この過去と現在のアプローチが同時に行われることが、私のドローイングの意味となる。

私のドローイングにはペインティングと違い、決定や固定というものがない。ドローイングはいつも柔らかく揺れている。ドローイングはときに時間と関係なく、他の何かとの関係を持とうとすることもするし、孤立することもある。私がしつこくドローイングをするのは、その自由さがいつも誠実で新鮮でなければならないからだ。

地下の B2-B の部屋の展示は、企画の福元さんとの対話の中で生まれ、そして実現した。テーブルの上には 33 年間の中からセレクトされた 120 枚のドローイングが時系列を完全に無視して新たな関係性を築く。この場合、整理することは時間をぐちゃぐちゃにするということである。20 台のテーブル上に水平に置かれたドローイングはよりそのことを生々しくする。テーブルを回遊しながら見るドローイングは、天地も曖昧になり、それははじめから絵画ではないし、薄いコピー用紙は絵以前に希薄なオブジェだと言える。うまく言えないが、なぜかいつも私は絵を描いているという意識が非常に薄い。だから私は美術が培ってきた「何を」「どう描く」といういろんな工程を極力省こうとする。このように幾つもの矛盾を重ねることで、私のドローイングに対しての姿勢や態度、そして更なるドローイングの可能性を明らかにしようとする。

周囲の壁に展示された鏡へのドローイングは、鑑賞者や映像の映り込みによって、他と同じく見ることの固定を許さない。鑑賞者とともに動き続ける像は、鏡そのものが映像とも言えるし、ここでもう一度ドローイングと映像を橋渡しし、3 部屋の展示全体を循環させる。

自分にとっての「ライフライン」とは、描くこと、定着された時間が並び連なること、それらを壊し組み直すこと、それが生活であり人生になること。そういった自分のドローイングを段階的に拡張させてくれるものになった。

そして、こうして展覧会「ライフライン」の会場を巡りながら思うことは、他のアーティストとの関係性、順路が語ること、茨木市福祉文化会館がアーティストや鑑賞者に与えた文脈やその行方、それらが複雑に絡み合い、あえて結実させずにとどめること自体がドローイングであり、それはまさに福元さんのドローイングだったのだと思う。

稲垣元則